

聖書日課 『からし種』 2022.9.11-9.18

<p>9月11日 (日)  創世記 49章</p>	<p>「ヤコブの息子たちよ、集まって耳を傾けよ。お前たちの父イスラエルに耳を傾けよ」(2節)。母の胎内の時から兄を押し除けるアクの強さを持ち、父親としてもさまざまな失敗を重ねたヤコブ。失敗を経験した者だからこそ語れる「主の真実と慈しみ」がある。一人ひとりに教訓を語りながら主の慈しみを証しする父の言葉を、12人はどのように聞いたのだろうか。</p>
<p>12日 (月)  創世記 50章</p>	<p>「あなたがたはわたしに悪をたくらみましたが、神はそれを善に変え、多くの民の命を救うために、今日のようにしてくださったのです」(20節)。神は「悪を善に変える方」というヨセフの告白に、兄たちは深く慰められたことだろう。神は「多くの民を救うために」今日も働き続けておられる。今すぐに結果が見えなくても「悪を善に変える方」を信じて祈っていききたい。</p>
<p>13日 (火)  出エジプト 1章</p>	<p>「助産婦はいずれも神を畏れていたもので、エジプト王が命じたとおりにせず、男の子も生かしておいた」(17節)。絶対的権力を持つファラオを前に、多くの者たちが「従わざるを得ない」と残虐行為に加担していったことだろう。けれども助産婦たちは「神を畏れた」。神が与えたもう勇気と知恵をもって行動した。今日「神への畏れ」を心の真ん中にいただいて。</p>
<p>14日 (水)  出エジプト 2章</p>	<p>「モーセは彼をゲルシムと名付けた。彼が、『わたしは異国にいる寄留者(ゲール)だ』と言ったからである」(22節)。モーセの独りよがりの、暴力に頼った「正義感」はあえなく頓挫し、彼は荒れ野に逃げる。王宮で育ち、何でも思い通りにできると勘違いしていたモーセではなく、何もできない無力な自分を知ったモーセをこそ、神は必要とされたのであった。</p>

聖書日課 『からし種』 2022.9.11-9.18

<p>15日 (木) 出エジプト 3章</p>	<p>「神は言われた。『わたしは必ずあなたと共にいる。このことこそ、わたしがあなたを遣わすしるしである』(12節)。モーセは自分の無力を知っていた。ファラオの絶大な権力の前に吹けば飛ぶような自分であることを。けれども神がモーセに求められたのは彼の知恵や能力ではなく、「必ずあなたと共にいる」という神の約束を握りしめて歩む信仰であった。</p>
<p>16日 (金) 出エジプト 4章</p>	<p>「主は彼に言われた。『一体、誰が人間に口を与えたのか。一体、誰が口を利けないようにし、耳を聞こえないようにし、目を見えるようにし、また見えなくするのか。主なるわたしではないか』(11節)。主なる神は私たちに「信仰」を求められる。神ご自身のための闘いならば、不要な力は取り除かれ、必要な力は必ず与えてくださると信じ切る「信仰」を。</p>
<p>17日 (土) 出エジプト 5章</p>	<p>「モーセは主のもとに帰って、訴えた。『わが主よ。あなたはなぜ、この民に災いをくだされるのですか。わたしを遣わされたのは一体なぜですか』(22節)。「神さま、約束が違うではないですか!」。困惑したモーセの顔が目浮かぶ。けれども荒れ野の厳しい旅を前に、モーセは訓練を受ける必要があった。後で振り返ると見えてくる神の計画に信頼したい。</p>
<p>18日 (日) 出エジプト 6章</p>	<p>「そして、わたしはあなたたちをわたしの民とし、わたしはあなたたちの神となる」(7節)。神がどんなときにも私たちに「ご自分の民」とする決断が先にあって、私たちは「神さま!」と呼ぶ信仰をいただいていく。苦難の旅の中で私たちが不信仰にも神を足蹴にする時にも、神は私たちに「我が民よ!」と呼びかけ続けてくださる。その恵みに応えていきたい。</p>